

高齢者福祉実践における目的に関する一考察

——社会老年学の知見を用いた明確化——

家 高 将 明*

Study on the Aims of Social Work for the Elderly

——An Investigation Applying a Social Gerontology Knowledge Standpoint——

Masaaki Ietaka

要旨：近年、福祉サービスが市場競争の渦中に置かれる中で、社会福祉実践が断片的に捉えられることが多々ある。そのような理論と実践における乖離が生じるひとつの背景として、社会福祉実践における目的が様々に解釈されてきたことが挙げられる。このような乖離を埋めるためには、まず社会福祉実践における目的そのものを明確に定める必要がある。そこで本研究は、高齢者福祉実践における目的の明確化を試みることを研究目的とする。そして本研究は、社会福祉実践の目的概念である QOL 及び自己実現を整理することで、一般的な社会福祉実践における目的について明らかにした。さらに本研究は社会老年学における知見を用いて、社会福祉実践における目的の明確化を図るが、その前提として社会老年学における知見を用いることの妥当性を検証した。その結果、社会老年学の知見を社会福祉実践において援用することが可能であることが明らかとなった。そして社会老年学の中で主観的幸福感として捉えられてきた3つの次元を、高齢者福祉実践における目的として用いることが有益であると提案した。

Abstract : In recent years, it is often that the operation of social work services is understood fragmentarily while social work services are put through the eddies of market competition. Because of discrepancies between such theoretical approaches and the actual operation of social work services, the purposes behind the operation of social work services have been interpreted variously. It is necessary to establish with clarity the aims of the operation of social work services in order to bridge such differences. Therefore, the purpose of this study is to define the aims of the operation of social work services for the elderly. In this study, the aims of the operation of social work services were elucidated by codifying the goal concepts of QOL and self-realization of these services. Moreover, this study applied a social gerontology knowledge standpoint to shed light on the aims of the operation of social work services. As a premise to that, the validity of using such a social gerontology knowledge standpoint was assessed. As a result, it was revealed that a social gerontology knowledge standpoint could prove useful when employed in the operation of social work services. In conclusion, this study suggests that the three dimensions perceived as standards of subjective well-being in social gerontology would be useful when applied to the aims of the

*関西福祉科学大学大学院 社会福祉学研究科 臨床福祉学専攻 学生

operation of social work services for the elderly.

Key words : 高齢者福祉実践 social work services for elderly, QOL quality of life 自己実現 self-realization サクセスフルエイジング successful aging 主観的幸福感 subjective well-being

はじめに

近年、我が国は急速な高齢化の進展がみられる中で、高齢者介護が大きな社会問題となっている。そして今日では、民間企業における福祉サービスも社会福祉サービスの担い手として期待され、営利事業としての福祉サービスを切り離して社会福祉について論じることはできないようになってきている。

そうした中、福祉サービスが商品として位置づけられる傾向により、社会福祉実践がマニュアル化された接遇原則に置き換えられるといった指摘¹⁾や、これまで社会福祉の世界でみられることのなかった顧客満足 (Customer Satisfaction: CS) という経営学的な視点が社会福祉における現場の中に持ち込まれることによって社会福祉実践の矮小化が危惧されるといった指摘がみられる^{2,3)}。このような指摘の背景として、今日における社会福祉実践の目的が抽象的に語られ、実践そのものが混沌とした状況に陥っていることが挙げられる。

そして社会福祉実践におけるこのような誤解を解消するためには、よりいっそうの目的の明確化が必要となる。これまでに筆者は、社会福祉における顧客満足の意味について検討を行っている。そして顧客満足の中に経営における差別化戦略を意味する CI (Corporate Identity) という概念が含まれることから、顧客満足と社会福祉実践における目的は異なることを明らかにした⁴⁾。しかしこの考察は、顧客満足と社会福祉実践における目的が異なるものであることを明らかにしただけであり、目的そのものを明確にしたものではない。

そこで本研究は、混沌とした社会福祉実践に

おける目的を明らかにすることを目的として、これまで多くの論者によって目的概念として取り上げられてきた QOL (Quality of Life) と自己実現を軸に整理を行う。またよりいっそうの目的の明確化を図るためには、全体的な意味から目的について捉えるだけでなく、焦点を絞りより詳細に検討する必要がある。よって本研究は高齢者福祉分野に焦点を絞り、社会老年学の知見を用いて検討をすすめる。その際、社会老年学の知見を用いることの妥当性について検討を行う。

I QOL から捉えた社会福祉実践の目的

ここでは社会福祉実践における目的の明確化を図るために、社会福祉実践の目的概念として位置づけられる QOL 及び自己実現の両概念が、どのように社会福祉における先行研究の中で取り扱われているかをみていくことにする。

1. QOL とは何か

QOL は、「生活の質」、「生命の質」、「人生の質」と訳して用いられる概念である。この概念は社会福祉における独自の概念ではなく、アメリカにおいて 1960 年代末から 1970 年代の初めごろに経済学や社会学の分野から生まれたとされている⁵⁻⁷⁾。これは当時の社会が経済的な意味での量的拡大が重視され、工業化による環境汚染の問題、都市化による人間関係の希薄化など様々な問題が顕在化する中で提起されるようになってきたのである。

QOL は生活概念を含む用語であることから、拠って立つ立場によって捉え方の異なる概念である。その意味で、QOL に一致した定義は存在しない⁸⁻¹⁰⁾。しかし一致した見解が全くみら

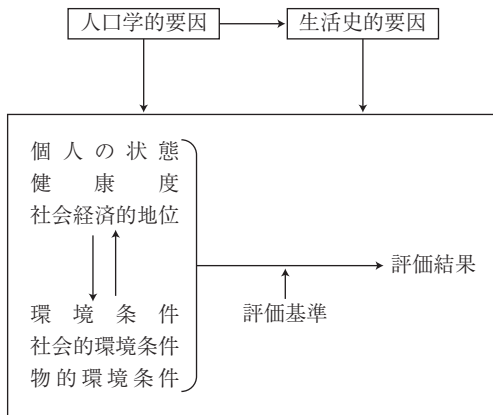


図1 QOLにおける構成要素の関係

出典：古谷野亘「高齢者の健康とクオリティ・オブ・ライフ」『保健社会学Ⅰ 生活・労働・環境問題』有信堂高文社 1993年 p132

れないわけではなく、先行研究のレビューを行うことにより QOL の構成要素及びそれらの関係について明らかにされている^{11, 12)}。

ここでは、QOL の構成要素間の関連について検討した古谷野の先行研究を取り上げる¹³⁾。古谷野は、QOL に関する先行研究のレビューから、QOL の定義において①個人の状態、②環境条件、③個人の主観的評価のいくつかが含まれ、その組み合わせによって概念規定が行われていることを報告している。そしてこれらの構成要素に人々の生活の態様を規定する人口学的要因と生活史的要因を加え、図1のように構成要素を関連づけて QOL のモデルを提示している。

このモデルの構成要素である「個人の状態」は、個人の健康度や社会経済的地位などを指し、「環境条件」は社会的環境条件や物理的環境条件を示している。また「評価結果」は、客観的要素である「個人の状態」と「環境条件」との相互作用によって導き出される、個人の主観的な実感を指している。そして「評価結果」は、「個人の状態」と「環境条件」における相互作用の結果がそのまま結びつくのではなく、個人の主観的な「評価基準」を通して最終的な評価結果が導き出されているとされている。さ

らにこのモデルにおいては、性別や年齢などを示す「人口学的要因」と学歴、職歴、既往歴など示す「生活史的要因」を位置づけ、それぞれの構成要素が「人口学的要因」と「生活史的要因」によって規定されるとしている。つまり QOL の定義に含まれる各構成要素の関連を示すこのモデルから、QOL が人間における生活の全体をその範疇に置きつつ、社会的な状況を受けての個人における主観的な実感を示す概念であることがわかる。

以上のような特徴をもつ QOL 概念であるが、次にこのような QOL が社会福祉においてどのように捉えられているのかについてみていきたい。しかし QOL は社会福祉において重要な概念として位置づけられながらも、QOL を対象として直接的に取り上げた先行研究は少なく、QOL の概念は社会福祉の中で自明のものとして扱われている¹⁴⁾。

2. 社会福祉における QOL

浅野¹⁵⁾は、第三者から捉えた QOL と当事者の主観的な QOL に相違がみられることを事例及び Cohn 等の先行研究から明らかにしている。そして両者の相違から、高齢者自身の幸福や満足感に視点を置くことが求められることを指摘している¹⁶⁾。また主観的満足のみに傾斜することが、客観的側面を含んだ全体的視野に基づく QOL を把握することを阻害すると指摘している。そして QOL は、個人が生活する社会体制のなかでの最低生活の上に立ち、さらにその個人の精神的充足や主観的満足を達成することであるとしている。この浅野の指摘から、社会福祉における QOL は利用者の主観的な実感に重きが置かれること、支援を展開する上で主観的な側面だけでなく客観的な側面についても目を向ける必要があることがわかる。

また西尾¹⁷⁾は QOL が示す生活について3つに分類した上で、社会福祉実践が対象とする生活について指摘している。西尾は QOL が示す生活について、日常生活上の活動の側面から生

活を捉える「日々の生活の営みとしてのライフ」、生命レベルの側面から生活を捉える「生命としてのライフ」、人生の価値や生きざまとしての側面から生活を捉える「生涯としてのライフ」の3つに分類する。そして社会福祉実践は、長期の視点をもって利用者の人生としてのライフの充実を利用者と支援者がともに考えていこうとするものであると指摘している。この指摘から、社会福祉における QOL が人生や生きざまとしての側面から生活を捉えていることがわかる。

またこの他にも、Lawton の QOL における定義を基調とした長澤の先行研究がある。長澤¹⁸⁾は、社会福祉の領域において QOL について具体的に捉えられることのないまま論じられていることを指摘した上で、社会福祉実践における QOL の定義化を試みている。

長澤の定義に触れる前に、まず Lawton における QOL の定義についてみていきたい。Lawton¹⁹⁾は QOL について、「過去、現在、未来における個々人の人と環境のシステムに関する個人の主観的基準と社会－規範的基準による多次元の評価」であるとしている。この定義からわかるように、Lawton は QOL を「個人の主観的基準」と「社会－規範的基準」の二つの側面における評価として捉えている。そして彼が指摘する多次元性とは、ADL や IADL、社会的活動など指す「行動能力」、物理的環境や社会的なネットワークなどを指す「客観的環境」、生活における主要なそれぞれの領域について人々が行う主観的な認知による評価を意味する「認知された QOL」、それぞれを受けて評価された最終の結果を意味する「心理的幸福感」²⁰⁾に分類される。また Lawton は、QOL の定義において時間性について取り上げ、人と環境とのシステムに関する継続性、力動性を強調している。そして過去の記憶された質は現在や未来の質を評価する理論的枠組みを与え、未来への期待は現在の質を条件づけるとしている。

つまり Lawton が捉える QOL は、客観的な

要素である「行動能力」と「客観的環境」を受けて、「認知された QOL」が示され、さらに最終結果である「心理的幸福感」が示されるのであるが、その評価は個人の主観的な実感から捉える側面と一般的な社会規範として捉えられる側面の二つがあることを意味しているのである。そして個人の主観的な実感は、個人的な過去の記憶によって形作られた評価の枠組みを通して行われ、また個人による未来への期待によって方向づけられるのである。

この Lawton における QOL の定義を受けて、長澤は社会福祉実践における QOL の定義を「支援展開のために、利用者とソーシャルワーカーが協働し、人と環境の交互作用から成る利用者の生活の多領域を、時系列で評価したものである」としている。そしてこの長澤の定義の特徴は、Lawton の影響を受けて QOL の評価主体を利用者と支援者に求めていることにある。

これまでの QOL に関する検討から、社会福祉領域における QOL は個人の状態と環境条件の相互作用状況を当事者の評価基準によって判断することで、主観的な評価結果が導きだされる古谷野のモデルと概ね一致するかたちで捉えられているといえる。しかし西尾が支援者と利用者がともに QOL について考えると指摘していることや長澤の定義からわかるように、社会福祉における QOL は、支援者による評価も求められている。これは利用者の評価に対して支援者の評価を上位に位置づけるのではなく、専門家としての客観的な情報を利用者に提供することを意味している。つまり社会福祉における QOL は、支援者による客観的な評価を踏まえた上で導き出される利用者の主観的な実感を示す概念なのである。そして最終的に導き出される利用者の主観的な評価は、利用者の多様な価値観や評価のための多様な枠組みに基づくものであることから、社会福祉における QOL は多様な価値基準及び多様な枠組みを認める概念であるといえよう。

II 自己実現から捉えた社会福祉実践の目的

1. 自己実現とは何か

QOLと同様に社会福祉実践の目的概念として多くの論者から取り上げられる概念として、自己実現がある²¹⁾。この自己実現概念は Maslow や Rogers の影響を受けているとされる²²⁾。そこでまず Maslow や Rogers が主張する自己実現についてみていきたい。Maslow は、自己実現したと思われる人々を対象に、Rogers はサイコセラピーの過程において健康を回復した人々を対象に研究を行った。その中で両者は、自己実現の段階にある人の特徴について次のように述べている。

Maslow²³⁾は、自己実現とは文字どおり自己の実現であり、異なる二人の自己が全く同じであることはありえないとする。そして自己実現の段階にある者は自分自身の人間性をすべての欠点を含め、また理想の姿からほど遠い点を認め、受け入れることができるとしている。また彼らは自己の本質、人間性、多くの社会生活、自然や物質的现实を哲学的に受容することで、確固たる価値体系の基盤を築きあげているとする。そしてこれらの基盤により、慣習的というよりは自律的で個人的な倫理規定をもっているとしている。また Maslow は、彼らが行動においてかなり自発的であり、人生に何らかの使命、達成すべき仕事をもっていて、自分の外の問題にエネルギーを注いでいるとしている。

この他に Maslow は、自己実現の段階にある人でも人間の欠点を数多くもっていると指摘する。彼らは愚かでむだで思慮に欠けた習慣も身につけている場合もあり、浅薄な虚栄心や高慢さをもっていることや、かんしゃくを起こすことも珍しくないとしている。さらに Maslow は、元来一般的な人間がこれらの特徴をもつことを指摘した上で、大部分の人間が文化の中に組み込まれていくにつれて、そうした特徴を失うとする。そしてこのような特徴を阻害する文化の中で、ほんの少数の人々しか自己実現を達

成することができないと指摘している。

次に Rogers²⁴⁾は、自己実現の段階にある人間像を「十分に機能する人間」として描き表わしている。この「十分に機能する人間」は、自分はこう「あるべきだ」と思っている脅迫的なイメージや、文化によって期待されているものから離れた状態にあるとしている。そしてあるがままの自己として、自分がそこに向う目標を選び、どのような活動や行動が自分にとって意味があり、何が無意味なのかを自己決定としている。またこれらの人は、自分自身が認めがたい気持ちであっても、自らの一部として受け入れ大切にするとしている。そして自己の内部で進行する過程を信頼し、自分自身の内側に見出した価値によって生き、独自の方法で自分自身を表現するとされている。

Rogers は「十分に機能する人間」について、この方向に進んでいくことは容易ではなく、完全に成し遂げられたことはないとするともに、それはどこまでも続く人生の道であると指摘している。

以上、Maslow と Rogers が示す自己実現の段階にある人間像についてみてきたが、両者はかなり類似したものであることがわかる²⁵⁾。両者における主張の共通点を挙げるならば、自己実現の段階にある人とは自己に対する内・外の状態を受容し、自らの価値基準をもち自律的な生活を送ることのできる者であるといえる。しかし社会福祉の中で語られる自己実現が Maslow や Rogers の影響を受けているとはいえ、かならずしも社会福祉の自己実現と一致するとはいえない。そこで次に社会福祉の中で語られる自己実現についてみていきたい。

2. 社会福祉における自己実現

自己実現について述べる社会福祉の先行研究に目を向けると、「自己実現は自分の可能性を最大限度実現すること」や「あるべき自己」へ向かうことなどのように定義されている^{26, 27)}。また岡田²⁸⁾は、社会福祉における自己実現が自

己選択・自己決定との関わりの中で語られてきたことを指摘している。確かに、庄司²⁹⁾が IL 運動の中で追求されてきた意味での自立を自己決定・自己管理を前提とする、「自己実現としての自立」として表現しているように、社会福祉における自己実現は自己選択・自己決定との関わりの中で語られている。

このような自らの生活を自らが選択し、決定する姿は、概ね Maslow や Rogers の自己実現像に一致するといえる。しかし岡田³⁰⁾は、Maslow が知的障害者や精神障害者等を自己実現している人の対極においていることから、社会福祉独自の自己実現観が必要であると指摘していることに注意を払わなければならない。

Maslow や Rogers の指摘する自己実現像は、自らの内的及び外的な状況を的確に把握し、物事を取捨選択し、自ら主体的な生活を築くことのできるより積極的な人間像が描かれている。これに対して社会福祉における自己実現像は、糸賀³¹⁾が重度の障害をもつ少年がオムツ交換の際に、全力をふりしぼり、腰を少しでも浮かそうとしている姿の中に生き抜こうとする彼らなりの精一杯の努力を見出し、「どんなに重い障害をもっていても、だれととりかえることもできない個性的な自己実現をしている者なのである。人間とうまれて、その人なりの人間となっていくのである」とする言葉に表れているように、Maslow や Rogers の指摘する自己実現像と異なる生き方、人間像を孕んでいることがわかる。

よって社会福祉における自己実現は、他者との相対的な比較の中で行われるものではなく、多様な形を含んだ彼らなりの人生を実現するための主体的な取り組みを自己実現として捉えることに特徴がある。そして社会福祉における自己実現は、Maslow と Rogers が指摘するようなほんの少数の人々しか達成することができないものではなく、個々人の能力に応じたその人なりの主体性の発揮そのものを自己実現として捉える柔軟性に独自性があるといえよう。

Ⅲ 高齢者福祉分野における 目的概念への焦点化

これまで社会福祉実践における目的の明確化を図るために、目的概念である QOL と自己実現についてみてきた。その中で、社会福祉において QOL が利用者の実感を意味する主観的な幸福感を高めることを目指し、また自己実現は多様なその人らしい生きざまの実現を目指すことを意味していることが明らかとなった。このことから、社会福祉実践は利用者とワーカーにおける協働関係による支援を展開することによって、個々人の能力に応じたその人なりの主体的な生活の実現を図り、その者の主観的な幸福感を高めていくことを目的としていることがわかる。そして社会福祉における自己実現が多様な生きざまを、QOL が様々な価値基準や評価のための枠組みを認めていることから、社会福祉実践における目的は多様な人間及び場面において用いることができる特性をもつといえよう。しかし社会福祉における目的が、このように柔軟な特性をもつが故に、用いる人によって様々に解釈され、混沌とした状況に陥っている。

社会福祉実践の目的が多様に解釈される状況を縮減するためには、目的の明確化を図ることが求められる。しかもその明確化された特性は、一定の価値観を押し付けることなく、多様な価値観に対して柔軟な立場をとるものでなければならない。そこで注目したいのが、古谷野の QOL モデルである。このモデルの特徴は、性別や年齢などを指す人口学的要因と学歴、職歴、既往歴などを指す生活史的要因が、個人の状態と環境条件の相互作用状況に対する当事者の評価基準、そして最終的に判断された主観的な評価結果を包括して規定するものとして位置づけていることにある。さらにこのモデルは、人口学的要因が生活史的要因を規定すると位置づけており、人口学的要因を根源的な因子として位置づけている。つまりこのモデルは、多様

な価値を認める評価基準やそこから導き出された評価結果が人口学的要因に規定されることを示しており、評価基準や評価結果の中に特定の人口学的要因の特性が見られることを意味しているのである。このことから人口学的要因に焦点を当て、特性の限定を図ることによって、一定の価値観を押し付けることなく、社会福祉実践における目的の特性に関する明確化を図ることが可能になると思われる。そこで次に、本稿は人口学的要因の一つとして位置づけられる年齢に着目し高齢期に焦点を絞り、高齢期に焦点を当てた研究が行われている社会老年学の知見を用いて、社会福祉実践における目的について明らかにしていく。

1. 社会福祉実践と社会老年学における知見の共通性

高齢期は一般的に、心身機能の低下や社会的な関係及び役割が縮小する時期であるといわれている。社会老年学は、こうした特徴をもつ高齢期における「幸福な老い」を追求してきた。そして社会老年学は、「幸福な老い」を意味するサクセスフルエイジングの定義化が試みられ、また「幸福な老い」（以下、サクセスフルエイジングとする）の程度についてモラールや生活満足感といった操作的概念を用いて測定を行い、さらにはサクセスフルエイジングに影響を及ぼす要因についての探索が行われてきた。

そして社会老年学について、その知見が個人的な要因に偏りすぎているという批判もある。これは社会老年学の中で明らかにされてきたサクセスフルエイジングの結果指標³²⁾であるモラールや生活満足感に強く影響を及ぼす要因が、主観的健康感、社会経済的地位、社会的活動など個人的な要因に限定され議論されていることにある³³⁾。本研究は、人と環境との相互作用を重視する社会福祉の立場から社会福祉実践の目的について言及を行うものである。その意味で、研究における視点が個人的なものに偏る社会老年学の知見を援用することに違和感を受け

ることも考えられる。

このことから、まず社会老年学における知見と社会福祉実践の一致について見ていく必要がある。そこで社会老年学の中で目的概念として位置づけられるサクセスフルエイジングを取り上げ、両者の一致についてみていく。

社会老年学におけるサクセスフルエイジングの定義として著名なものは、Palmore や Rowe と Kahn のものがある。Palmore³⁴⁾は3つの基準を示し、これに合致している状況をサクセスフルエイジングと定義している。この3つの基準とは、①75歳まで生き延びること、②身体的な機能に障害がないこと、③いつも幸福で満足し心配がないことであるとしている。また Rowe と Kahn³⁵⁾は、非病理ではあるが疾病や障害のリスクが高い状態である「普通」のエイジングと、疾病や障害のリスクが低く高い機能をもっている状態である「サクセスフル」エイジングにわけている。そしてサクセスフルエイジングについて①病気、障害、そして高血圧や喫煙、肥満などのリスク要因が無いこと、②身体的、精神的機能を維持すること、③生活にともなう活発な関わりを行っていることの3つの規準を示している³⁶⁾。これらのサクセスフルエイジングの定義から、社会老年学における知見が個人的な側面に傾斜し、健康という価値観に重きを置いた医療モデルの立場にあるといえよう。

しかしこうした定義に対する反論もある。Strawbridge 等³⁷⁾は、先述した Rowe と Kahn の3つの基準に一致する高齢者と、高齢者自身による主観的な評価によるサクセスフルエイジングの状態を比較している。そして Rowe と Kahn の水準にしたがっている高齢者はほとんどなく、彼等の水準に一致しないにもかかわらず半数の高齢者が自らをサクセスフルエイジングの状態であると捉えていることを明らかにした。そして Strawbridge 等は、Rowe と Kahn の基準に基づくサクセスフルエイジングの状態が達成困難であることを踏まえて、サクセスフ

ルエイジングという言葉そのものが、ほとんどの高齢者を不幸であると位置づけたり、高齢者に失敗を経験させるといった意図しない効果をもつと指摘している。

このように社会老年学の中においても、健康に重きを置く姿勢に対して批判の声が上げられている。またこのような批判を受けた Kahn³⁸⁾ は、Strawbridge 等の批判を評価しつつも、反論を展開している。その中で Kahn はサクセスフルエイジングを成功、失敗の 2 文法で固定して捉えることが問題であり、複数の次元から捉える必要があることを提案している。そして Rowe と Kahn モデルだけでなく、Baltes と Baltes のモデルや Riley と Riley モデルを取り上げ、これらが補助的であると、これらを統合していくことの必要性を指摘している。

ここで取り上げられる Baltes と Baltes のモデルは、「補償を伴う選択的最大化(Selective optimization with compensation : SOC)」と名づけられたモデルである。Baltes 等³⁹⁾ はこれをサクセスフルエイジングのための戦略であるとし、加齢に対する適応の一般的な過程であるとする。このモデルは、「選択」、「最大利用」、「補償」の 3 つの要素からなる。「選択」とは、老化による損失のために、機能しているわずかな領域に彼らの生活を限定していくことを示し、「最大利用」はもてる能力を拡大し豊かにするための行動に従事する視点を示し、「補償」は特定の行動能力が失われた場合や若しくは機能が低下した時に補う何らかの手段を指している。Baltes 等⁴⁰⁾ はこれら 3 つの要素について具体的な例を提示している。それによれば、「高齢のマラソンランナーは、同じ年齢のグループの中で競争することや、より少なく、より簡単なコースを走ること (選択)、異なる靴やウォームアップの時間を延ばすこと (補償)、そして適合性を増すためにダイエットを行うことやビタミンを取ることを (最大化) によって勝つための目標を維持できるかもしれない」としている。

また Riley と Riley のモデル⁴¹⁾ は、人々の生活における変化と社会的構造の変化の間に、社会的構造が昔のかたちを保持する傾向にあることから遅れが生じることを指摘し、十分に有用な能力をもつ高齢者に対して、年齢を基準として退職を迫るなど社会的構造の遅れが文化的な側面や社会的な習慣、法律の中に組み入れられていることを指摘している。そして Riley 等は、こうした文化的な側面や社会的な習慣、法律の中に組み入れられている構造的な遅れを改善していく必要があることを指摘している。

Kahn が指摘するように今日における社会老年学のサクセスフルエイジングは、Rowe と Kahn モデル、Baltes と Baltes のモデル、Riley と Riley モデルを統合して捉えるようになってきている。そしてこのような知見は、人と環境との交互作用を重視し、人と環境の双方に働きかける社会福祉実践と相反するものではないといえよう。

2. 社会福祉実践へのサクセスフルエイジングにおける結果指標の活用

社会老年学においてサクセスフルエイジングの結果指標として、モラールや生活満足感が用いられている。サクセスフルエイジングの結果指標として、モラールや生活満足感など主観的な評価が用いられる理由については、Havighust がサクセスフルエイジングの測定について複数の手続きがあるとして、それらの妥当性について検討した先行研究の中で明らかにされている⁴²⁾。それについてみると Havighust は、サクセスフルエイジングの測定のための方法として、①社会的に望ましいとされる生活様式に合致するかどうかによる測定、②中年期の活動を維持しているかどうかによる測定、③現在の活動や地位に対して満足を感じているかどうかによる測定、④生活に対する幸福や満足を感じているかどうかによる測定があるとしている。

そして①について、高齢者個人の価値観や基準と関係なく社会の側が一方向的に評価している

という点で欠点をもつとしている。②については様々な活動に参加している程度を見ているだけであることから、サクセスフルエイジングの適切な評価であるとはいえないとしている。③は、活動や社会参加というものに限定しているという点で適切ではないとしている。そして④については、活動的なライフスタイルを好む人はそのようなライフスタイルを維持することに満足し、消極的で家庭中心のライフスタイルを好む人は、そのようなライフスタイルに満足するというように多様な生活様式に対応できるとし、サクセスフルエイジングの評価として妥当であるとしている。

このように社会老年学がサクセスフルエイジングの結果指標として、モラルや生活満足感を用いていることは、社会老年学が人間の生活に多様なライフスタイルがあることを認め、多様な価値観に対して柔軟な立場にあることを示している。またサクセスフルエイジングの結果指標が人間の多様性を認めていることは、その結果指標が社会福祉実践においても援用できる可能性を示している。そこで次に、社会老年学がどのような基準をもってサクセスフルエイジングを捉えてきたかについてみていきたい。

サクセスフルエイジングの結果指標であるモラルや生活満足は、総称して主観的幸福感と呼ばれるが⁴³⁾、古谷野によれば社会老年学で捉えられてきた主観的幸福感は、人生全体を振り返っての満足感などを指す「認知－長期的な次元」、老いることについての評価などを指す「認知－短期的な次元」、心理的な安定などを指す「感情－短期的な次元」の三つの次元に大別して捉えられてきたとされている⁴⁴⁾。

つまり社会老年学におけるサクセスフルエイジングは、①人生全体を振り返っての満足感、②老いることについての評価、③現在における心理的な状態によって捉えられているのである。Havighustの指摘のように、これらは全て特定の価値観に基づくものではなく、価値自由なものである。よってこれらの次元を、社会福

祉実践の中で援用し、社会福祉実践における目的として位置づけることは可能であるといえよう。

結 語

今日における社会福祉実践は、その目的が抽象的に語られ、混沌としている状況にある。そしてその中で、社会福祉実践が理論と切り離され How to ものとして利用されていることや安易に経営学における概念である顧客満足と結び付けられる状況がみられるようになってきている。

本研究は、社会福祉実践が矮小化されて解釈されている現状に課題意識を置き、社会福祉実践における目的を明らかにするために、社会福祉実践における目的概念として位置づけられる QOL 及び自己実現に関する先行研究の整理を行った。また社会老年学の知見を用いて、社会福祉実践における目的の明確化を試みた。その中で、社会老年学が人間の生活に多様なライフスタイルを認め、多様な価値観に対して柔軟な立場をとり、サクセスフルエイジングを①人生全体を振り返っての満足感、②老いることについての評価、③現在における心理的な状態の3つの次元で捉えていることが明らかとなった。

今日の社会福祉実践において、しばしばその目的があたかも1次元で存在しているかのように満足感や幸福感が語られることがある。人間の生活を全体的に捉え、人と環境との交互作用に介入するための社会福祉実践における理論とその実践を一致した形で展開していくためには、利用者の満足感や幸福感を抽象的な1次元によって捉えるのではなく、複数の次元から把握することが有効である。社会老年学において用いられてきた3つの次元による理解は、これまでみてきた QOL 及び自己実現の特徴と一致するものである。また生活モデルを基盤とし、利用者の実感を重視する社会福祉実践の理論と抵触するものでもない。

よって社会老年学における主観的幸福感とし

て捉えられてきた①人生全体を振り返っての満足感、②老いることについての評価、③現在における心理的な状態の 3 つの次元を高めることを高齢者福祉実践の目的として位置づけることができる。そして支援者によって恣意的に設定された次元における利用者の主観的な満足感や幸福感ではなく、これら 3 つの次元を念頭に置き、利用者の主観的な満足感や幸福感を高める支援を展開することによって本来の社会福祉実践の展開が可能になるだろう。

最後に、本研究において残された今後の課題について言及したい。本研究は社会福祉実践の目的として 3 つの次元を提示したが、これらの次元を達成するための方法については検討することできなかった。これまで社会福祉における先行研究の中で、社会福祉実践における支援方法について多様な蓄積がされてきている。しかしそれらの多くは、様々な実践場面における共通の項目を示したものがほとんどである。よってより具体的なサービスに焦点を絞り、そこにおける支援方法について検討していかなければならない。

また 3 つの次元に対する支援は、支援者の直接的な取り組みだけで完結するものではない。そしてその達成には、支援者レベル、サービス事業者レベル、地域レベル、制度レベルにおける課題が影響を及ぼす。よって今後は、これらの次元を達成するための阻害要因についても検討していなければならないといえよう。

注

- 1) 安井理夫『実存的・科学的ソーシャルワーク エコシステム構想に基づく支援技術』明石書店 2009 pp 88-89
- 2) 山口は、社会福祉サービスの利用者を一般の営利企業における「顧客」とみなし、利用者の満足度合いを一般の企業における「顧客満足」と同一のものとして論じている文献が多くあることを指摘している。(山口厚江『高齢者介護ビジネスの社会的責任』文眞堂 2005 年 p 132)
また顧客満足を社会福祉実践の目的として位置づける文献には以下のようなものがある。

- ・小室豊允『ポスト措置時代福祉経営戦略』簡井書房 1998 年 p 317
- ・小島理市「効率・品質保証の重要性」『福祉産業マネジメント』同文館出版 2004 年 p 159
- 3) 家高将明「社会福祉実践における目的に関する一考察－社会福祉における顧客満足の検討を通して－」『関西福祉科学大学紀要』13 号 2009 年 pp 203-213
- 4) 家高将明「前掲書」
- 5) 柴田博「QOL」『サクセスフル・エイジング 老化を理解するために』ワールドプランニング 1998 年 pp 48-49
- 6) 中川薫「クオリティ・オブ・ライフ (QOL) の意味するもの－がん患者を対象にした QOL 指標を手がかりにして－」『健康観の転換－新しい健康理論の展開』東京大学出版 1995 年 p 105
- 7) 萩原俊男 三上洋「医療における QOL とはなにか」『からだの科学』188 1996 年 pp 16-19
- 8) 土井由利子「QOL の概念と QOL 研究の重要性」『保健医療科学』53(3) 2004 年 pp 176-180
- 9) 藤井美和「高齢期の QOL とスピリチュアリティ」『高齢期を支える社会福祉システム』放送大学教育振興会 2007 年 p 67
- 10) 柴田博「求められる高齢者像」『サクセスフル・エイジング』ワールドプランニング 1998 年 p 49
- 11) 中川薫「クオリティ・オブ・ライフ (QOL) の意味するもの－がん患者を対象にした QOL 指標を手がかりにして－」『健康観の転換－新しい健康理論の展開』東京大学出版 1995 年 pp 112-115
- 12) 古谷野亘「高齢者の健康とクオリティ・オブ・ライフ」『保健社会学Ⅰ 生活・労働・環境問題』有信堂高文社 1993 年 pp 131-133
- 13) 古谷野以外に、QOL に関する先行研究のレビューを行った先行研究は中川のものがある。中川は、先行研究のレビューから QOL に関わる 7 つの要素を抽出している。そこでは、QOL の諸要素として身体的健康、心理的状态、日常生活活動、社会的相互作用、社会経済的状态、生活の場 (環境)、全般的な生活満足度がとりあげられている。また中川は QOL を捉えるにあたって、病気や自分の人生への態度を付け加えている。これは、中川が医療の立場から QOL を検討していることによるものであるが、同様の見解に上田の「体験としての障害」がある。「体験

- としての障害」は、自己の生をどのように意味づけ、方向づけ、価値づけるかにかかわるものであり、自己の体験する障害の受け止め方を示す概念である。つまり疾患や障害のいずれにしても、当事者の受け止め方が重要であり、その受け止め方によって QOL に対する評価は異なるのである。よって中川の指摘する病気や自分の人生への態度とは、疾患を患ったものに限定されるものではなく、人間の生そのものへの意味づけ、言い換えるならば価値観として位置づけることができるといえる。そしてこのように捉えるならば、中川の指摘は概ね古谷野の主張と一致するものであるといえる。
- 14) 久保田晃生 波多野義朗「社会福祉学における QOL 研究の意義」『社会福祉学』第 47 巻第 3 号 2006 年 pp 43-51
 - 15) 浅野仁『高齢者のソーシャルワーク実践』川島書店 1995 年 pp 2-16
 - 16) その他、社会福祉実践において主観的 QOL が上位であると位置づける先行研究には以下のようなものがある。
 - ・白澤政和「日本における社会福祉専門職の実践力－評価と戦略－」『社会福祉研究』第 90 号 2004 年 pp 13-20
 - ・Jung Won Lee「主観的 QOL の多様性－ギルド理論による QOL の多様性の解明－」『社会福祉学』第 43 巻第 1 号 2002 年 pp 91-101
 - 17) 西尾裕吾「ソーシャルワークの固有性をめぐって」『ソーシャルワークの固有性を問う－その日本の展開をめざして－』晃洋書房 2005 年 pp 14-16
 - 18) 長澤真由子「ソーシャルワークにおける生活の質の概念化」『龍谷大学大学院研究紀要』13 号 2006 年 pp 94-110
 - 19) Lawton, M. P., A Multidimensional View of Quality of Life in Frail Elders. In Birren, J. E. eds., The Concept and Measurement of Quality of Life in the Frail Elderly, Academic press, 4-27, 1991
 - 20) Lawton, M. P., Environment and Other Determinants of well-being in Older People., The Gerontologist Vol.23, No.4, 349-357, 1983
 - 21) 自己実現を社会福祉実践の目的として位置づける先行研究は以下のようなものがある。
 - ・岡本民夫「ソーシャルワーク実践の原理と思想」『社会福祉実践の思想』ミネルヴァ書房 1989 年 pp 96-112
 - ・嶋田啓一郎「ヒューマンサービスの理論」『福祉と関連サービス』中央法規 1988 年 pp 16-55
 - ・黒川昭登「社会福祉と自己実現」『大阪市立大学家政学紀要』第 19 巻 1971 年 pp 241-247
 - ・岡田武世「社会福祉と自己実現概念」『社会関係研究』第 1 巻第 1 号 1995 年 pp 39-60
 - ・鷹野吉章「社会福祉における自己実現サービスの思想と位置」『コミュニティソーシャルワークと自己実現サービス』万葉舎 2000 年 pp 260-275
 - ・藤原芳朗「介護福祉思想と介護福祉の専門性」『介護福祉思想の探求 介護の心のあり方を考える』ミネルヴァ書房 2006 年 pp 61-72
 - ・嶋田啓一郎「ヒューマンサービスの理論」『福祉と関連サービス』中央法規 1988 年 pp 16-55
 - 22) 谷口政隆「自立・自己実現の主体としての社会福祉」『社会福祉の原理と思想 主体性・普遍性をとらえ直すために』岩崎学術出版社 1998 年 pp 112-113
 - 23) A. H. Maslow 著 小口忠彦監訳『人間性の心理学』産業能率短期大学出版部 1971 年 pp 223-263
 - 24) C. R. Rogers 著 諸富祥彦他訳『ロジャース主要著作集 3 ロジャースが語る自己実現の道』岩崎学術出版 2005 年 pp 152-168
 - 25) R. J. DeCarvalho 著 伊藤博訳『ヒューマニスティック心理学入門 マズローとロジャース』新水社 1994 年 pp 154-157
 - 26) 岡田武世「前掲書」
 - 27) 黒川昭登「前掲書」
 - 28) 岡田武世「前掲書」
 - 29) 庄司洋子「社会福祉の対象－生活問題の展開」『社会福祉論』有斐閣 1993 年 P 201
 - 30) 岡田武世「前掲書」
 - 31) 糸賀一雄『福祉の思想』日本放送出版協会 1968 年 p 177
 - 32) 社会老年学においては、モラルや生活満足感をサクセスフルエイジングの結果指標として一般的に表現する。これは、サクセスフルエイジングの概念が大筋の一致した見解はみられるものの、完全に一致した定義がないことから、サクセスフルエイジングの状態そのものを測定するのではなく、モラルや生活満足感といった操作的概念を用いてサクセスフルエイジングの程度を測定していることに起因する。つまりサクセスフルエイジングの状態そのものを測る

- のではなく、そこにおける実感の程度を測定するという意味において、結果指標という言葉を用いているのである。
- 33) Larson は主観的幸福感の要因分析を行った先行研究のレビューを行い、その結果から主観的幸福感に強く影響を及ぼす要因として、主観的健康感、社会経済的地位、社会的活動などを挙げている。
- Larson, R., Thirty years of research on the subjective well-being of older Americans. *Journal of Gerontology*, 33, 109-125, 1978
- また日本においても以下の研究において、Larson のものと同様の結果が得られたことが報告されている。
- ・前田大作他「老人の主観的幸福感の研究－モラル・スケールによる測定の試み－」『社会老年学』No.11 1979年 pp 15-31
 - ・浅野仁他「老人ホーム入所者のモラルとその要因」『社会老年学』No.14 1981年 pp 36-48
 - ・古谷野亘「モラルに対する社会的活動の影響－活動理論と離脱理論の検証－」『社会老年学』No.17 1983年 pp 36-49
- 34) E. palmore., Predictor of successful aging. *The Gerontologist*, 19(5), 427-431, 1979
- 35) Rowe, J. W. Kahn, R. L., Human aging : Usual and successful aging. *Science*, 237, 143-149, 1987
- 36) Rowe, J. W. Kahn, R. L., Successful aging. *The Gerontologist*, 37, 433-440, 1998
- 37) W. J. Strawbridge, M. I. Wallhagen, R. D. Cohen., successful aging and well-being : self-rated compared with Rowe and Kahn. *The Gerontologist*, 42, 727-733, 2002
- 38) Kahn, R. L., On "successful aging and well-being : self-rated compared with Rowe and Kahn." *The Gerontologist*, 42, 725-726, 2002
- 39) Baltes, P. B. and M. M. Baltes eds., *Successful Aging : Perspective from Behavioral sciences*, Cambridge University Press. pp 1-34, 1990
- 40) M. M. Baltes. L. L. Carstensen., *The Process of Successful Ageing*. *Ageing and Society*, 16, 397-422, 1996
- 41) Riley, M. W. and Riley, J. W., Structural lag : Past and future. In M. W. Reiley, R. I Kahn and Foner (Eds.) *Age and structural lag*. New York : wiley. pp 15-36, 1990
- 42) R. J. Havighurst., Successful aging. *The gerontologist*, 1, 8-13, 1961
- 43) Larson, R., op. cit.
- 44) 古谷野亘他「生活満足度尺度の構造－主観的幸福感の多次元性とその測定－」『老年社会科学』1989年 pp 99-115